

妊娠後期に追加で不規則抗体が検出された症例について

◎石川 樹¹⁾、玉置 潤¹⁾、深井 奈々¹⁾、小山 彩子¹⁾、伊藤 里歩¹⁾、石原 恭美¹⁾、十良澤 勝雄¹⁾、加賀山 朋枝¹⁾
昭和大学藤が丘病院¹⁾

【はじめに】妊婦における不規則抗体検査および抗体価測定を実施することは、胎児・新生児溶血性疾患（HDFN）の発症予測のため重要である。今回、妊娠初期より抗 C を保有し、妊娠後期の不規則抗体検査にて抗 e と抗 Jk^a を検出した症例を経験したので報告する。

【症例】37 歳女性。血液型 B 型、DccEE。出産 3 人、流産 1 人。輸血歴なし。第 3 子妊娠時から不規則抗体検査陽性であり、第 4 子分娩管理目的で受診され不規則抗体検査と抗体価測定が依頼された。

【測定機器および測定方法】不規則抗体スクリーニングは全自動輸血検査装置 オーツ ビジョン Max(オーツ・クリニカル・ダイアグノスティクス株式会社)、同定検査は的手法によるカラム凝集法、抗体価測定は反応増強剤無添加 37°C60 分間接抗グロブリン試験で実施した。

【検査および経過】妊娠 25 週の時点で抗 C は検出されていたが、抗体価は検出感度以下だった。以降 1 か月ごとに抗体価を測定し、妊娠 29 週で 2 倍、妊娠 33 週で 4 倍となった。妊娠 35 週に検体が提出された際に抗 e が検出され、

妊娠 37 週に帝王切開手術における輸血準備のため提出された検体から抗 Jk^a が検出された。翌日、帝王切開にて分娩後、臍帯血が提出された。臍帯血による患児の血液型はオモテ検査のみで B 型、DCCeE、Jk(a+b+)。血漿中に母親から移行した抗 C を認めた。直接抗グロブリン試験は広範囲(3+)、抗 IgG(3+)、抗 C3b,C3d(0)であり、グリシン・塩酸/EDTA 解離法よる解離液中に抗 C と抗 Jk^a を認めた。

【まとめ】当院では妊娠初期で不規則抗体検査が陰性だった場合、妊娠後期には不規則抗体検査を実施していない。しかし、本症例では妊娠初期より抗 C を保有していたため、中期・後期にも検査を実施していたことにより新たに検出した抗 e と抗 Jk^a を見逃すことなく臨床へ報告することができた。今回の症例を経験して、産婦人科領域において不規則抗体検査のタイミングなど、ガイドラインを遵守して検査を行うことの大切さを改めて実感した。

連絡先 045-974-6235